

# エートスとしてのリベラリティ —自由ハンザ都市ハンブルクの政治と文化の伝統—

清 永 修 全

東亜大学 芸術学部 アート・デザイン学科  
kiyonaga@toua-ac.jp

ICE (Intercity-Express) でハノーファーの中央駅を後にして北に1時間半ほど行くと、荒涼とした平原風景の彼方から、くすんだエメラルド色に塗られた大きな三連のアーチ橋が姿を現す。その上を渡ってしばらくすると、やがて運河沿いにレンガ造りの貯蔵倉庫や商業ビルの群れが見え始める。広大な空には、この街にやってくる旅人を出迎えるように、カモメが飛び交う。ハンブルクである。

運河が街の四方に延び、多くの橋で結ばれた独特の街並みは、しばしば「北のヴェネツィア」と称えられてきた<sup>1</sup>。街の中心部には、白亜のオフィス・ビルやホテルに取り囲まれた内アルスター湖が広がり、白塗りの遊覧ボートが行き交う。そこから少しばかり奥に入った運河の傍らにネオ・ルネサンス様式の壮麗な市庁舎がそびえ立つ。

この街は、その正式名称を「自由ハンザ都市ハンブルク」という。とりわけハンザ同盟の興隆以来、今日のドイツをはるかに越えて、北ヨーロッパの全体の政治と経済に大きな影響力を持ち続けてきた都市である。にもかかわらず、この北ドイツの街は日本人にはいまだにかなり馴染みが薄い。いうところの「ロマンチック街道」や「ライン下り」、首都ベルリンや芸術の都として名高いバイエルン州の州都ミュンヘンを目的にドイツに旅する人はあろうが、ことさらハンブルクを見たくてドイツに赴く人の話は聞かない。

しかし、この街にはドイツの他の都市には見られない独特の面白さや汲み尽くせない魅力があ

る。本稿の目的は、近代における文化政策の展開を中心にハンブルクの歴史を紹介しつつ、筆者自身も多年を過ごしたこの街の魅力の一端に迫ることにある。

## 1. 港湾都市ハンブルクのプロフィール

2013年現在で約175万の人口を擁するハンブルク<sup>2</sup>は、首都ベルリンに次ぐドイツ第二の大都市である。

14世紀には、リューベックと並んでハンザ同盟の中核的自治都市として栄えた。その際、リューベックがバルト海交易の拠点であったのに対し、ハンブルクは、北海や北大西洋に向って開かれた北方きっての積み替え貿易港として、前者との密接な協力関係のもと、果敢な活動を展開した<sup>3</sup>。神聖ローマ帝国時代には「帝国自由都市」としての承認を得、以後約250年にわたって政治的自立を守っている<sup>4</sup>。現在も「世界への門 (Tor zur Welt)」として自己を位置づけ、アムステルダムとロッテルダムに並ぶ北方ヨーロッパ有数の貿易港として輸出大国ドイツの鍵をにぎる都市であり続けている。

連邦制ならではの独自のアイデンティティを育んできており、文化的にも多彩な地である。メディア産業の盛んな街で、シュピーゲル誌、ツァイト誌、ロヴォルト、ユリウス、ヴェルテルスマン、フェリックス・マイナーをはじめとするドイツ語圏きっての重要な出版社がその居を構える他、ドイツにおける映画製作の重要な拠点の一つ

としても知られる。近年、国際的にも目覚ましい活躍をみせるトルコ系ドイツ人監督ファティ・アキン (Fatih Akin, 1973-) の生まれ故郷であり、その活動の中心的な舞台ともなっている<sup>5</sup>。音楽的には、かつて指揮者ギュンター・ヴァント (Günter Wand, 1912-2002) が活躍した北ドイツ交響楽団、振り付け師ジョン・ノイマイヤー (John Neumeier, 1939-) を擁するハンブルク・バレエ団を有し、またタリア劇場をはじめ舞台芸術のシーンとしてもたえず注目を集めている。フリードリヒヤルンゲをはじめとするドイツ・ロマン主義絵画、モダンアートや現代アートの充実したコレクションで知られるドイツ屈指の近代美術館の一つであるハンブルク美術館や、ドイツ有数の東洋コレクションで知られるハンブルク美術工芸博物館もハンブルクの文化シーンを語る上で欠かすことのできない存在である。ここに、4万人を越える学生を抱えるハンブルク大学はもとより、ゲルハルト・リヒターやアンゼラム・キーファーと並んで現代ドイツのアートシーンを代表する巨匠とみなされるジグマール・ポルケ (Sigmar Polke, 1941-2010) が教鞭をとった事で知られるハンブルク芸術大学など、19の多種多様な大学が彩りを添えている。

## 2. ハンブルクにおける文化行政の困難とその背景

### 1) 文化不毛の地？

しかし、ハンブルクのこうした華々しい文化的基盤は、実はそう古い時代に遡るものではない。その大部分は18、19世紀の間に、極めて困難な状況下で、少しずつ築き上げられてきたものであった。

後にハンブルク美術館の初代館長として帝政期ドイツの芸術文化行政において大きな手腕を発揮することになるアルフレート・リヒトヴァーク (Alfred Lichtwark, 1852-1914) がまだベルリンの美術工芸博物館でアシスタントとして働いていた時の話である。ハンブルクから新設美術館の館長として招聘を受けたことをその良き理解者でもあった歴史家ハインリッヒ・フォン・トライチュケ (Heinrich von Treitschke, 1834-1896) に話したところ、トライチュケは断念することを強く勧める。ハンブルクなど、芸術とはおよそ無縁の、

所詮は商人たちの街に過ぎない、というわけである<sup>6</sup>。ハンブルクに対する19世紀後半のドイツ人知識人の認識を語ってあまりあるエピソードである。

しかし、このトライチュケの評価も、決して帝都ベルリンで活躍する高名な知識人の身勝手な偏見とばかりは言えない部分がある。ベルリンのように国際的な名声を誇る多彩な教育機関はこの街にはなかったし、それどころか「大学はなく、工科大学はおろか、アカデミーもない<sup>7</sup>」のが現実であった。そもそもハンブルクも含めて北西ドイツには画家や彫刻家、建築家のための専門教育を提供できる教育機関はこの時代には存在しておらず、才能に恵まれた野心的な芸術家たちは、やむを得ずパリやミュンヘン、ハノーファー、シュトゥットガルトなどの都市に修行の場を探るか、活躍の地を求めて郷里を後にせざるをえなかった<sup>8</sup>。しかも、こうした状況は、造形芸術の分野のみにあてはまるものではなかった。ハンブルク生まれの音楽家ヨハネス・ブラームス (Johannes Brahms, 1833-1897) が、当地で音楽家として生計を立てる困難から、自らの意に反して故郷を去り、ウィーンに赴かざるを得なかったのはいかにも象徴的であった<sup>9</sup>。

それだけではない。文化的伝統、とりわけ文化財の保護に対する市民の著しく乏しい関心もハンブルクにおける芸術文化の低迷に一役かっていた。たとえば、1789年には政府が所有していた絵画ギャラリーが経済難を理由に競売にかけられている他、1802年には、市の中心部にあったゴシックの大聖堂が解体される運びとなるが、このとき議案はほとんど抵抗らしい抵抗もないまま通過している。その上、寺院内の貴重な美術工芸品はまともな登録もないまま売り払われ、あるいは取り外し切らないまま教会もろとも解体撤去されていた。その石材も売られるか、あるいはエルベ川の河川工事に使われてしまうありさまであった。1807年から1837年にかけてさらに5つの中世教会建築が同様に街から姿を消している<sup>10</sup>。しかし、こうした歴史的建築物の破壊は、むしろ進歩主義的・合理主義的にしてプラグマティックな精神の体現として半ば積極的に推進されてきた感すらあった<sup>11</sup>。

リヒトヴァークは、そんなハンブルク市民の文化財に対する無神経さを1819年以來の街の公式名称をもじって「自由解体都市ハンブルク<sup>12)</sup>」と揶揄してみせ、今日にいたるまで語り種となっている。そのハンブルクで最初の文化財保護法が制定されるのは、ようやく1921年のことで、ハンブルクがかねがね対抗意識を抱いていたプロイセンから遅れること77年後のことであった<sup>13)</sup>。現在とは違って、街の通りに、ハンブルクに功績のあった人物やドイツ史上の著名人の名前をつけることによって住民に歴史的な絆を喚起するといった努力もなされることはなく、ハンブルクは文字通り「記憶のない街<sup>14)</sup>」であった。

## 2) 大学設立運動

近代におけるこうしたハンブルクの文化的風土を知るにあたって同様に有益なのがハンブルク大学設立の経緯であるように思われる。ハンブルクがはじめて自らの大学を手に入れるのはようやく第一次世界大戦後の1919年のことである。1385年に設立をみるハイデルベルク大学や1409年に創設されるライプチヒ大学など、14世紀から15世紀の時代に創立された大学も珍しくないドイツにあって<sup>15)</sup>、これはいかにも遅い。

では、20世紀を迎えるまでハンブルクの市民が大学設立にそもそも何の関心も持っていなかったかといえば、決してそうではなかった。遅まきながら1847年には「世界市民的な大学<sup>16)</sup>」の設立を目指して委員会が結成されている。しかもハンブルクでは、1613年には上流階層の要請に応えるべく、すでにアカデミック・ギムナジウム(Das Akademische Gymnasium)が設立されていた。当時ヨーロッパにおいて高い評価と名声を勝ち得ていた、合理主義的聖書解釈で知られる神学者ヘルマン・ザムエル・ライマールス(Hermann Samuel Reimarus, 1694-1768)なども、このギムナジウムで教鞭を執っており、ハンブルクは啓蒙都市としての面目を保っていたのである。1847年の委員会結成は、時代の変容に鑑みて、このギムナジウムを大学へと発展改称しようとするものであった。

1873年にも当時の市長のイニシアティブのもとで改めてこのプロジェクトが着手される。しか

し、この発案も、この後に続く幾多の試み同様、議会で多数を得ることはできず挫折を余儀なくされている。その障害の最たるものは、この自治都市の政治において大きな影響力と発言権を持っていた富裕商人達が大学という教育機関に抱いていた深い懸念にあった。

当時ハンブルクでは、商人の子弟は16歳前後で早々と学校を去ると、修行のため10年近くにわたって海外の営業所に送り出されることが珍しくなかった。海外生活に長け、様々な人間関係を築き上げることはその後の経済的成功に大きな意味を持った。それゆえ、商人達は、彼らの子弟がその職業養成上極めて大切な時期に長期にわたって中断を余儀なくされるのみならず、理論的な研究に関心を奪われることで実践的な問題をないがしろにするようになることを恐れた。大学運営にかかる膨大なコストの負担も、慎重な商人達にとって看過できない問題であった。

こうして、その後60年余に渡る有識者の不断の運動にもかかわらず、1913年の議会においてすら大学設立案は否決されている<sup>17)</sup>。90年代以来精力的に大学設立運動に関わっていたリヒトヴァークが1911年検討会議の席上皮肉を込めて放った言葉が今日まで伝えられている。「個人と国家がしでかす最もコストのかかる贅沢とは、偏狭さと無知である。<sup>18)</sup>」この後で触れるように、すでにハンザ同盟の時代からハンブルクの行政は富裕商人を中心とする有力市民の合意形成を通して運営されてきており、いかなる斬新なプロジェクトといえども、この原理・原則を無視して実現されることはありえなかった。こうしてハンブルクにおいて大学が設立をみるのは、第一次世界大戦後の11月革命の時期を経て、旧勢力と政治体制が一掃された後、わけても選挙制度が実質的に民主化されるのを俟たなければならなかった。

## 3. ハンブルクにおける政治的アイデンティティと文化運動

1) ハンブルクの政治システムと共和主義の伝統  
社会学者マリアンネ・ローデンシュタインは、中世以来ドイツ語圏きっての商業都市として発展してきたフランクフルトとハンブルクの政治文化

史を比較しつつ、ハンブルクの独自性の核心を次の二点に見ようとする。第一点は、政治的に比較的に自立したポジションを長期にわたって堅持しえた港湾自治都市としてのアイデンティティであり、そして第二点は、ハンブルク独特の政治的意思決定のシステムである「コンセンサス・モデル」である。この「コンセンサス・モデル」の根幹をなす評議会（Rat<sup>19</sup>）と市議会（Bürgerschaft）の合意形成に基づく統治原理の確立は、すでに13世紀に遡る。このシステムのお陰で、その都度有力な商人一族が出てくることはあったにせよ、フランクフルトのように門閥家（Patriziat）が形成されることはなく、経済界は比較的に自立性を保ち続けることができた。また、たとえ移住民の出身であったとしても、ルター派で、かつ経済的に成功を納めていれば比較的短期間のうちに評議会のメンバーに受け入れられえた。こうしたオープンさも、この帝国自由都市独特のリベラルな政治風土の形成に一役かっていた<sup>20</sup>。

もちろん、この街のオープンさには政治的・経済的の狭き門も少なからず含まれていたであろう。たとえば、ハンブルクは、16世紀から18世紀にかけて、とりわけ宗教戦争の時代、オランダからの宗教難民やフランスのユグノー、ポルトガルの裕福なユダヤ系移民、再洗礼派の信者たちをはじめ、ヨーロッパの様々な宗教的マイノリティーを受け入れている。特に1564年、アントウェルペンが陥落した際には、逃れてきた多くのオランダ人難民に在留許可を与えているが、そのことによって当時最新の砂糖の精製技術やテキスタイルの加工技術、証券会社のシステムなど、市の経済的繁栄にとって貴重な情報を労せずして手に入れている<sup>21</sup>。そうした中で1558年にはハンブルクは北欧およびドイツ語圏で最初の証券取引所を設立するに至っている<sup>22</sup>。人口の面でもこうした移民の受け入れによって街は潤っており、1600年の統計では、すでに人口の半数が非ハンブルク出身者によって占められており、約4分の1はオランダ系であった<sup>23</sup>。しかし、ハンブルクは寛大な仕方で彼らに在留を認めはするものの、だからといって彼らに市民権を認めることはなかった。1800年、ハンブルク市の人口は約10万人ほどに成長するが、その中で完全な市民権を有する純然たる市民はわ

ずかに3千人から4千人ほどにすぎなかった<sup>24</sup>。

参事会と市議会による合意形成に基づく先の政治システムは、この自由都市に脈打つ共和主義の伝統と表裏一体のものであった。ここで、1897年にハンブルク市の威信をかけて建設されたネオ・ルネサンス様式の新市庁舎ほど、この政治的伝統を雄弁に語るものは他にあるまい。その「共和国の間」の壁に描かれているのは、アテネ、ローマ、フィレンツェ、アムステルダムなどの4つの歴史上の共和制都市国家である<sup>25</sup>。ハンブルクは、これらの共和制都市国家の系譜の中に自らを位置づけることで、その伝統の継承者としての自らのアイデンティティの確立をはかろうとする。この壁画が描かれたのが、まさにドイツ・ナショナリズムが勃興してくる最中であることを考えると、その意味はさらなる重みを持つてくるのではないだろうか。

さらに、ここで特筆に値するのは、こうしたハンブルク市民の自由自治都市としての自らの政治的自立性に対するこだわりの強さである。たとえば、評議会のメンバーは原則生涯その地位にあったが、在任中はいかなる諸外国の君主からも称号を受け取ってはならない規定になっていた。しかも、その「諸外国の君主」には、プロイセン王からドイツ皇帝まで含まれている徹底ぶりであった<sup>26</sup>。

## 2) 市民イニシアティブによる文化支援運動

では、文化行政に関して、ハンブルクとドイツのその他の諸邦との決定的な違いは何であろうか。前出のリヒトヴァークは極めて簡潔に次のように説明する。他の地域では、概ね絶対主義時代の王侯貴族の遺産を受け継いだ行政機関によって学芸の支援がなされていくのに対し「ハンブルクではごく最近にいたるまで国家機関は文化に関する事柄についてイニシアティブは取ってこなかった。国家にかかわって市民が乗り出す。あらゆる領域において事の成り行きは同じであった。どこかである欲求が生まれ、あるいは予見されると、有力者がその友人達と結束力の強い協会か、ゆるやかに結成された委員会をつくり、資金を集め、研究所を設立し、管理機関を組織し、プライベートな資金が続く限りそれを運営し続ける。そして、

その後で国家に委譲する<sup>27)</sup>のである。つまり、こと学芸に関する限り、それはひとえに市民、なかんずく街の行政に携わる大商人や有力者の主体性とイニシアティブにかかっていたということである。こうした自立した市民による自主的な活動の尊重という大義には、しかし当然予測されうるネガティブな側面があった。様々な意欲的な文化事業も、その指導者の死とともに潰えてしまうことが少なくなっただけでなく、そもそも長期的な視点に立った文化事業の継続的な営みが制度的に難しかったのである<sup>28)</sup>。その一方で、こうした状況は、他のドイツ諸都市には見られない公共性の精神の発達と市民参加に基づく自治という独特の文化的土壌を用意することになる。

その意味では、1765年に結成された「諸芸術および実用産業促進協会 (Gesellschaft zur Förderung der Künste und nützlichen Gewerbe)」、通称「愛国協会 (Patriotische Gesellschaft)」ほど、近代におけるハンブルクの文化行政のあり方を体現しているものはなかった。それは「公共福祉事業支援のためのプライベートな力の結集」の例として最たるものであり、「自主的な文部省」とでもいうべき存在であった。実際、その活動は、職業教育養成所、救貧院、養老施設、海難救護施設、郵便局、土地信用金庫、入浴施設、水産学校、図書館、植物園、天文台の設立から労働者の教育支援活動にまで及び、そればかりか、そもそもハンブルクにおける文化・経済福祉活動支援に関わるほとんどの機関がこの協会の活動に由来していた<sup>29)</sup>。

ちなみに、こうした「愛国」という言葉は、決して後の19世紀に勃興してくる民族主義・ナショナリズム的な意味にとられてはならない。エンゲルハルト・ヴァイグルも、啓蒙都市としてのハンブルクを象徴する文化活動として、1724年創刊の雑誌『愛国者 (Der Patriot)』を取り上げる際に指摘しているが、これらの文脈にいう「愛国」とは、その出自を問わず、あくまでハンブルクという「都市共同体」のために私利私欲なく尽力する人々の精神的態度を示している<sup>30)</sup>。その意味で、「愛国協会」はまさに啓蒙の精神を体現する組織だったのであり、そこにはカトリック教徒やユダヤ人教徒をはじめ、宗教的マイノリティーに属す

る市民も受け入れられていた<sup>31)</sup>。

芸術に関してもイニシアティブは原則市民の手で委ねられていた。ハンブルクにおいてこの分野の活動を主として担うことになるのは1817年に始まる「芸術協会 (Kunstverein)」であった。「愛国協会」同様、ハンブルク市の行政機関からは全く独立した有志の市民による結社であり、市民主導による芸術協会としてはドイツ最古のものである。作品収集から展覧会活動、市立ギャラリーの設置、地元の芸術家の支援にいたるまで幅広く手がけており、1868年のハンブルク美術館の建設も芸術協会のイニシアティブによる<sup>32)</sup>。1886年、この美術館に初代館長として就任したリヒトヴァークは、その就任演説で「我々が望んでいるのは、そこに立って待っている美術館ではなく、我が住民の芸術教育に積極的に乗り出していく機関である<sup>33)</sup>」と語り「市民教育の場としての美術館」という位置づけを明確に打ち出し、美術館教育史にその名を残すことになる。しかし、それはその志向性と根本的な姿勢において、「愛国協会」以来のハンブルクにおける文化事業の伝統に根ざすものであった。

### 3) 「植民地研究所」からハンブルク大学へ

さて、ハンブルクの市民、とりわけ有力な商人達の偏狭さの一端を物語るのが大学設立運動の歴史であったとするならば、逆にハンブルクのリベラルな文化的風土の持つ豊かな可能性を体現しているのも、この大学であった。これまでも見てきたように、この自由自治都市で所定の政治的手続きをふまえつつ大胆な文化事業を起こすには、揺らぐことのない信念に裏付けられた卓抜な戦略と、市民を説得する息の長い努力が不可欠であった。

ハンブルクにおける先の大学設立運動が実質的に新しい曲面に入るのは、1891年にヴェルナー・フォン・メレ (Werner von Melle, 1853-1937) が高等教育庁 (Oberschulbehörde) の監督を引き受けてからのことになる。ハンブルクでは、すでに1837年以来アカデミック・ギムナジウムの教授には、高等教育に対する市民の要望に応えるべく公開講義が義務づけられていた。この義務は1883年にはさらに拡張され、自然史博物館や

天文台、美術工芸博物館や国立物理化学実験所といった、ハンブルク市内のさまざまな研究所の所長にも課せられている。メレは、近い将来の大学設立の布石として、すでにあったこの「一般講義制度 (Das Allgemeine Vorlesungswesen)」を拡充することで素地を固めようとしたのである。各地の著名な講師陣を獲得・招聘する努力の中で、1913年から14年にかけての冬学期には講師の数は207人に達するまでになる。

さらに、1907年にはユダヤ系銀行家で街の有力者の一人でもあったマックス・ヴァールブルク (Max Warburg, 1867-1946) らの力添えのもと「ハンブルク学術財団 (Hamburgische Wissenschaftliche Stiftung)」を設立し、海外における調査研究活動を含む様々な学術プロジェクトへの支援を開始した。また、折しもドイツ帝国が植民地政策を拡張しようとしているのにあて込み、帝国政府との巧みな駆け引きを通して、1908年、ハンブルクに「植民地研究所 (Das Kolonialinstitut)」の設立を誘致することにも成功する。

植民地研究所の目的は、帝国内の植民地関係の情報や経験を一カ所に結集するとともに、植民地に関連して学者や商人、役人を養成することにあった。名称が「アカデミー」となっていないのは、大学設立反対派の反感をかわすための苦肉の策だったようである<sup>34</sup>。この研究所は、研究と教育の統一を理想とするフンボルトの教育理念を継承し、その双方に携わるものとして位置づけられたが、このことが後の大学設立の礎として重要なポイントとなる。

その語学部門だけを見ても、開設から3年後には、ヨーロッパ主要言語はもとより、中国語や日本語、アラビア語にいたるまで異例の45の語学コースが設置されている。それだけにとどまらず、1910年にはドイツで最初の中国学の講座と世界で最初のアフリカ学講座が設けられ、1914年にはドイツ語圏では初めての日本学講座が設置されている<sup>35</sup>。メレにとって、これらの諸研究機関は、来るべき日の大学設立の基礎として、相互の強い結びつきの中に運営されるべきものであった<sup>36</sup>。

さて、創設者達の思惑とは裏腹に、植民地研究所は第一次世界大戦の終結とともに早々とその存

在意義を失う。この研究所が西洋植民地主義の結晶化であり、ヨーロッパ中心主義の牙城であったことに疑いを挟む余地はない。にもかかわらず、海外に目を向け、諸外国の歴史と文化、言語研究に大きくフォーカスを絞った研究機関が設立されたことは、後の大学設立にとって決定的な意義をもった。実際、1919年、社会民主党主導による新政府のもと、ハンブルク大学が民主主義的な手続きによって設立されたドイツで最初の大学として誕生した時、市長の座についていたメレは新生大学の欠くからざる要素として「外国学 (Auslandskunde)」を掲げることになる<sup>37</sup>。

#### 4) ワイマール共和国時代の文化的象徴としてのハンブルク大学

ハンブルク大学をその創立にあたって際立たせることになったのは、哲学者エルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer, 1874-1945) や美術史家エルヴィン・パノフスキー (Erwin Panofsky, 1892-1968<sup>38</sup>)、後のノーベル賞受賞者である物理学者オットー・シュテルン (Otto Stern, 1888-1969)、法学者アルブレヒト・メンデルズゾーン・バルトルディ (Albrecht Mendelssohn Bartholdy, 1876-1936) などに代表されるリベラルにして気鋭の教授陣の相次ぐ招聘であった。このお陰で大学は短期間の内に国際的な名声を得るに至る。

さらに、ハンブルク大学は、学生全体における女学生や労働者階級出身者の占める割合はもちろん、全教員に対する女性教員の占める割合においても、帝国内にあった23の大学の平均値を大きく上回り、その社会的開放性においても際立っていた。また、いち早く教員養成課程を大学教育に統合した点でも注目に値した<sup>39</sup>。その民主的な校風は、言語・文化科学や国際交易論、国際政治学等の学問の重視にみられる世界への開かれた態度とも相まって、ハンブルク大学のメルクマールの一つとみなされることになる。

その志向性の一端は、前出のカッシーラーが、たとえ1929年冬学期から30年夏学期にかけての短い期間だけだったにせよ、ナチスをはじめとする極右勢力が急速に台頭してくる最中であって、ユダヤ人でありながら大学総長に選ばれたことにも見て取れる<sup>40</sup>。無論、こうしたエピソードにハ

ンブルク大学のリベラルさを神話化するのは端的に誤りであるにしても<sup>41</sup>、相対的にみて「進歩的」ではあった<sup>42</sup>。そして、ハンブルク大学は、何よりも自由ハンザ都市ハンブルクの政治文化の結晶であると同時に象徴であった。大学設立を議決する市議会の席上、社会民主党員エミール・クラウゼ (Emil Krause, 1870-1943) はその理念を次のように要約してみせる。「自由国家ハンブルクにふさわしく、教育も学びも自由であるべきだ<sup>43</sup>」。

ところで、ワイマール共和国時代の文化的成果の最良のものは「アウトサイダー」によるものであるとして、その体現をプライベートな研究所やサークルの活動に見いだしたのはアメリカ人歴史家ピーター・ゲイ (Peter Gay, 1923-) であった。そのゲイが「ワイマール精神の最高の栄光」として語るのがハンブルクの「ヴァールブルク研究所」である<sup>44</sup>。美術史家アビ・ヴァールブルク (Aby Warburg, 1866-1929)<sup>45</sup> によって設立されたもので、わけてもその「ヴァールブルク文化科学図書館 (Kulturwissenschaftliche Bibliothek Warburg)」は、カッシーラーやパノフスキーらの研究の発展にとって大きな意味を持つ夥しい資料を提供したのみならず、そこで育まれた人間関係と知的交流は 20 世紀の美術史や文化史研究に大きな一石を投じる成果を残し、精神的な刷新運動の舞台・拠点となったことで知られる<sup>46</sup>。それは、反知性主義に対する啓蒙主義の精神の牙城として、公的な教育機関である大学とプライベートな研究機関を往還する文化運動として発展していく<sup>47</sup>。すでにみてきたように、こうした学芸の営みのあり方は、ハンブルクにおいてはむしろ伝統的なものであり、その良質な部分でもあった。

さて、他の都市同様ハンブルクも、ワイマー

ル共和国時代の後半から暗い時代に入っていく。ナチスによる統治時代にはその政治的自立性を奪われ、文化的な伝統も中断を余儀なくされる<sup>48</sup>。1933 年、時代の表現主義芸術の支援者として知られたハンブルク美術工芸博物館の館長マックス・ザウアーラント (Max Sauerlandt, 1880-1934) が更迭されたのをはじめ<sup>49</sup>、大学でも 90 以上の学者たちが人種主義的な理由で職を追われ<sup>50</sup>、カッシーラー、パノフスキーをはじめ、その多くが国外に逃れていった。ヴァールブルク図書館もロンドンへと救出されている。1939 年の時点では、なおも一万人を越えるユダヤ人がハンブルク市内に残っていたが、そのほとんどはその後ホロコーストの犠牲になった<sup>51</sup>。

#### 4. 結びにかえて

戦後、1945 年 5 月ハンブルク大学は新総長エミール・ヴォルフ (Emil Wolff, 1879-1952) のもとで再出発することになる。その際、ヴォルフは 1933 年以前の伝統に立ち帰ることを強調するが、ハンブルクの社会もまたかつて築き上げた理念を再び掲げながら復興への困難な道を歩み始める。今日のハンブルクの繁栄は、その長い道のりの先にある。

山は分け隔て海は結びつける、と言ったのはヘーゲルだが<sup>52</sup>、開かれた港湾都市としての歴史に裏付けられた揺るぎないアイデンティティと啓蒙主義の時代以来の伝統は、人々がそこに忠実である限り、その不幸な中断にも拘らず、これからもたえず新たにその進むべき道を指し示し続けていくことであろう。筆者はそこに、この街に根を下ろしたエートスとしてのリベラリティを読み取らずにはいられないのである。

#### 注

<sup>1</sup> Alfred Lichtwark: *Hamburg. Niedersachsen*, Dresden 1897, S. 31.

<sup>2</sup> 正確には、2013 年 9 月現在で 1,748,790 人となっている。Statistisches Amt für Hamburg und Schleswig-Holstein, Statistikamt Nord: Monatszahlen-Bevölkerung. <http://www.statistik-nord.de/daten/bevoelkerung-und-gebiet/monatszahlen/> 移民の背景を持つ住民

は 2012 年の段階で約 497,000 人となっており、人口の約 28% を占める。 [http://www.statistik-nord.de/uploads/tx\\_standdocuments/SI14\\_017.pdf](http://www.statistik-nord.de/uploads/tx_standdocuments/SI14_017.pdf)

<sup>3</sup> ハンザ同盟の歴史については主として以下の書を参照。高橋理『ハンザ「同盟」の歴史 中世ヨーロッパの都市と商業』創元社 (2013)

<sup>4</sup> 覇権国家としてのオランダが大英帝国にとつ

- て代られる時代にハンブルクが果たした経済的・政治的に独特な役割が取り上げられ、議論されはじめている。玉木俊明『近代ヨーロッパの誕生 オランダからイギリスへ』講談社(2009)とくに第三章以降。
- <sup>5</sup> 『愛より強く (Gegen die Wand)』(2004)、『そして、私たちは愛に帰る (Auf der anderen Seite)』(2007)、『ソウル・キッチン (Soul Kitchen)』(2009)など、トルコ系ドイツ人社会の中で複雑なアイデンティティに揺れる人々の苦悩と人間模様を描き出した作品で高い評価を得、ドイツの内外で多くの賞に輝いている。
- <sup>6</sup> Alfred Hentzen: Ein unveröffentlicher Brief von Alfred Lichtwark Brief an Marie v. Bunsen vom 4.1.1906, in: *Jahrbuch der Hamburger Kunstsammlungen*, 3, Hamburg 1958, S. 10.
- <sup>7</sup> Alfred Lichtwark: Die Aufgabe der Kunsthalle. Antrittsrede - Den 9. December 1886, in: *Drei Programme*, Berlin 1902, S. 14-15.
- <sup>8</sup> Lichtwark: *Hamburg. Niedersachsen*, S. 17-19, 66-69.
- <sup>9</sup> Richard J. Evans: *Tod in Hamburg. Stadt, Gesellschaft und Politik in den Cholera-Jahren 1830-1910*, Hamburg 1996, S. 64. ハンブルク市が遅ればせながらブラームスを名誉市民として称えるのはようやく1889年で、それでも芸術家としてははじめてのことであった。その死後しばらく経った1909年には、ブラームスが育った地区に建てられた音楽堂(Musikhalle)の表広間にマックス・クリンガーによる記念碑が設置されている。Volker Plagemann: *Kunstgeschichte der Stadt Hamburg*, Hamburg 1995, S. 270-272.
- <sup>10</sup> Evans: *Tod in Hamburg*, S. 64. およびPlagemann: *Kunstgeschichte der Stadt Hamburg*, S. 214-219. ドーム解体の都市計画上ならびに政治的背景については、ibid., S. 218.
- <sup>11</sup> Jennifer Jenkins: *Provincial Modernity, Local culture and liberal politics in fin de siècle Hamburg*, New York 2003, pp. 220-221.
- <sup>12</sup> Henrike Junge-Gent: *Alfred Lichtwark: Zwischen den Zeiten*, Berlin 2012, S. 671. 折に触れ取り上げられるこのリヒトヴァークの有名な言い回しであるが、目下のところ出典は分かっておらず、もっぱら口伝で伝えられてきたものだという。
- <sup>13</sup> Jenkins: a. a. O., p. 220.
- <sup>14</sup> Alfred Lichtwark: *Eine Sommerfahrt auf der Yacht Hamburg*, Hamburg 1904, S. 88.
- <sup>15</sup> Wolfgang E. J. Weber: *Geschichte der europäischen Universität*, Stuttgart 2002, S. 23, 79. 代表的なものだけを挙げても、エアフルト(1379年)、ケルン(1388年)、ロストック(1419年)、トリア(1454年)、マインツ(1476年)、テュービンゲン(1476年)、ヴィッテンベルク(1502年)となる。
- <sup>16</sup> Michael Friedrich: Zurück ins Herz der Stadt? Die Hamburger Asien-und Afrikawissenschaften, in: *Universität im Herzen der Stadt, eine Festschrift für Dr. Hannelore und Prof. Dr. Helmut Greve*, Hamburg 2002, S. 171.
- <sup>17</sup> 同時代人による大学設立運動の詳細な記述として以下のものがある。Gustav Schiefler: *Eine Hamburgische Kulturgeschichte 1890-1920*, Hamburg 1985, S. 349-403. また、今日からの歴史総括としては以下の文献を参考のこと。Rainer Nicolaysen: "Frei soll die Lehre sein und frei das Lernen" *Zur Geschichte der Universität Hamburg*, Hamburg 2008. 当時のハンブルクの商人達の職業養成教育については、Lichtwark: *Hamburg. Niedersachsen*, S. 44ff.
- <sup>18</sup> Schiefler: a. a. O., S. 377.
- <sup>19</sup> 1860年以来、参事会(Senat)と呼ばれるようになる。Hermann Hipp: *Freie und Hansestadt Hamburg. Geschichte, Kultur und Stadtbaukunst an Elbe und Alster*, Köln 1996, S. 22. 両機関が完全に対等であることは、1712年の法規によってさらに疑問の余地のないものとして明記されることになる。
- <sup>20</sup> Marianne Rodenstein: Die Eigenart der Städte -Frankfurt und Hamburg im Vergleich, in: *Die Eigenlogik der Städte : neue Wege für die Stadtforschung*, hrsg. v. Helmuth Berking und Martina Löw, Frankfurt am Main 2008, S. 261-

- 311.
- <sup>21</sup> Jenkins: a. a. O., p. 23ff.
- <sup>22</sup> Hipp: a. a. O., S. 26. 1897年に竣工する今日のハンブルクの市庁舎は、左右二つの廻廊によって背後の証券取引所に接続されている。ハンブルクにおける政治と経済の密接な関係を極めてシンボリックな仕方で表している建築である。Rodenstein: a. a. O., S. 289.
- <sup>23</sup> Jenkins: a. a. O., p. 23-24.
- <sup>24</sup> Ibid., p. 25.
- <sup>25</sup> Plagemann: a. a. O., S. 235-236.
- <sup>26</sup> Evans: a. a. O., p. 61-64.
- <sup>27</sup> Lichtwark: *Hamburg, Niedersachsen*, S. 51.
- <sup>28</sup> Ibid., S. 71.
- <sup>29</sup> Ibid., S. 52-56.
- <sup>30</sup> エンゲルハルト・ヴァイグル「都市の出来事としての啓蒙主義」『啓蒙の都市周辺』（三島憲一・宮田敦子訳）岩波書店（1997）第三章、特に pp. 89-110.
- <sup>31</sup> Franklin Kopizsch: Die Patriotische Gesellschaft, in: *Industriekultur in Hamburg. Des Deutschen Reiches Tor zur Welt*, hrsg. v. Volker Plagemann, München 1984, S. 226. そのメンバーは1803年には550人を数えた。
- <sup>32</sup> Maria und Uwe M. Schneede: Der Zweck des Kunstvereins ist mehrseitige Mittheilung über bildende Kunst, in: *Industriekultur in Hamburg. Des Deutschen Reiches Tor zur Welt*, hrsg. v. Volker Plagemann, München 1984, S. 336-340.
- <sup>33</sup> Lichtwark: Die Aufgabe der Kunsthalle, S. 29. 実際、リヒトヴァークは、美術館の展示・作品購入プロジェクトをハンブルクの富裕層の市民による芸術支援運動や一般市民への教育普及運動、学校における教育活動などと結びつけていく。毎週日曜日に定期的にかかれていた公開講義には、常時500を越える席が必要だったという。Hans Präffcke: *Der Kunstbegriff Alfred Lichtwarks*, Hildesheim/Zürich/New York 1986, S. 145.
- <sup>34</sup> Veit Raßhofer: Das Hamburger Kolonialinstitut, in: *Vom Kolonialinstitut zum Asien-Afrika-Institut. 100 Jahre Asien-und Afrikawissenschaften in Hamburg*, hrsg. v. Ludwig Paul, Gossenberg 2008, S. 18.
- <sup>35</sup> Friedrich: a. a. O., S. 172, 174. これがドイツでも他に例を見ない今日の「アジア・アフリカ研究所」の礎となる。ところで、この時最初の日本学教授としてそのポストにつくのは、1889年以來25年にわたって東京帝国大学で教鞭をとったカール・フローレンツであった。Jörg B. Quenzer: Zur Geschichte der Abteilung für Sprache und Kultur Japans, in: *Vom Kolonialinstitut zum Asien-Afrika-Institut. 100 Jahre Asien-und Afrikawissenschaften in Hamburg*, hrsg. v. Ludwig Paul, Gossenberg 2008, S. 32ff. ドイツの日本学研究は今年誕生100周年を祝う。
- <sup>36</sup> Raßhofer: a. a. O., S. 13-30.
- <sup>37</sup> Nicolaysen: a. a. O., S. 22. 開設当時ハンブルク大学は、法・国家学部、医学部、哲学部、数学・自然科学部からなり、ドイツの大学の伝統からすると異例なことに、神学部が含まれていなかった。それが設立されるのは、ようやく第二次世界大戦後の1952年のことである。Michael Grüttner: Hort der Reaktion oder Hochburg des Liberalismus? Die Hamburger Universität in der Weimarer Republik, in: *Eliten im Wandel. Gesellschaftliche Führungsschichten im 19. und 20. Jahrhundert. Für Klaus Saul zum 65. Geburtstag*, hrsg. v. Karl Christian Führer, Karen Hagemann und Birthe Kundrus, Münster 2004, S. 180.
- <sup>38</sup> ハンブルクにおけるパノフスキーの活動については特に Rainer Donandt: Erwin Panofsky -Ikonologie und Anwalt der Vernunft, in: *Das Hauptgebäude der Universität Hamburg als Gedächtnisort. Mit sieben Porträts in der NS-Zeit vertriebener Wissenschaftlerinnen und Wissenschaftler*, hrsg. v. Rainer Nicolaysen, Hamburg 2011, S. 113-140.
- <sup>39</sup> ハンブルク（1926年）以前に教員養成課程を大学に設置したのはチューリングゲン（1922年）とザクセン（1923年）だけであった。Nicolaysen: a. a. O., S. 22.
- <sup>40</sup> しばしば語られてきたこととは異なり、カッシーラーは決してはじめてのユダヤ人大学総

長でもなければ、唯一のユダヤ人大学総長でもなかった。Grüttner: a. a. O., S. 188, 196. カッシーラーの共和国擁護に向けた取り組みとハンブルクでの活動については、Barbara Vogel: *Philosoph und liberaler Demokrat. Ernst Cassirer und die Hamburger Universität von 1919 bis 1933*, in: *Ernst Cassirers Werk und Wirkung. Kultur und Philosophie*, hrsg. v. Dorothea Frede und Reinhold Schmücker, Darmstadt 1997, S. 185-214.

<sup>41</sup> ワイマール共和国時代のハンブルク大学の学生や教員たちの政治的党派性や傾向の詳細な分析により、こうした「神話」の是正を試みる研究にグリュットナーの前掲論文がある。Grüttner: a. a. O., S. 179-197.

<sup>42</sup> Nicolaysen: a. a. O., S. 20-27 および Grüttner: a. a. O., S. 180-181.

<sup>43</sup> Nicolaysen: a. a. O., S. 8.

<sup>44</sup> ピーター・ゲイ『ワイマール文化』（到津十三男訳）みすず書房（1973）p. 50.

<sup>45</sup> ヴァールブルクの研究のプロフィールとその思想史的な位置づけに関しては、エルンスト・ゴンブリッチ『アビ・ヴァールブルク伝 ある知的生涯』（鈴木杜幾子訳）晶文社（1986）ならびに上山安敏「時代精神の中のヴァールブルクの文化科学」『ヴァールブルク学派 文化科学の革新』（松枝到編）平凡社（1998）pp. 99-130.

<sup>46</sup> 20世紀文化史における本研究所の意義については以下の書を参照のこと。山口昌男「二十世紀後半の知的起源」『本の神話学』岩波書店（2014、初版1971）pp. 1-37.

<sup>47</sup> カッシーラーとヴァールブルクの精神的共鳴とその後の相互助長的関係については以下の論考を参照のこと。Claudia Naber: »... die Fackel deutsch-jüdischer Geistigkeit weitertragen« *Der Hamburger Kreis um Ernst Cassirer und Aby Warburg*, in: *Die Geschichte der Juden in Hamburg*, Bd. 2, hrsg. v. Arno Herzig, Hamburg 1991, S. 393-406.

<sup>48</sup> Hipp: a. a. O. S. 24.

<sup>49</sup> Plagemann: a. a. O., S. 334.

<sup>50</sup> Nicolaysen: a. a. O., S. 31.

<sup>51</sup> Hipp: a. a. O. S. 27. ハンブルクの郊外にあるノイエンガンメ (Neuengamme) に建設された強制収容所では終戦までに約5万5千人のユダヤ人が命を落としている。Plagemann: a. a. O., S. 319.

<sup>52</sup> ヘーゲル『歴史哲学講義（上）』（長谷川宏訳）岩波書店（2004）pp. 154-155.